

地域情報（県別）

【福岡】医師会立は全国初、在宅医療に注力する診療所が開院-川本京子・八幡医師会立はっちい診療所所長に聞く◆Vol.1

八幡医師会館内に開設、理事が発案し所長に

2025年6月9日(月)配信 m3.com地域版

2025年4月、北九州市八幡医師会館に、医師会立では全国初となる在宅医療が中心の「はっちい診療所」が開院した。所長を務めるのは同医師会理事であり、健和会町上津役診療所で14年にわたり在宅医療を行ってきた川本京子氏。「患者さんを長く支えている開業医の先生方をサポートしたい」。診療所開設の背景には、地域における在宅ニーズの高まりだけでなく、医師としての川本氏の思いもあったという。（2025年5月7日オンラインインタビュー、計2回連載の1回目）

▼第2回は[こちら](#)



川本京子氏（北九州市八幡医師会提供）

高齢者増と病床削減、かかりつけ医制の普及を勘案

——資料によると、在宅医療に注力する医師会立の診療所は全国初だといいます。まずは、開設の端緒をお聞かせください。

医師会立の病院や診療所は全国的にあります。八幡医師会の先生が調べたところ、在宅医療に注力する施設はまだないそうです。開設の背景は、地域の医療状況と医師としての私の思いが関わります。

八幡も全国の傾向と同様に高齢化が進んでおり、在宅医療の必要性が高まっています。この地域は八幡東区と八幡西区で構成されており、北九州市の副都心である西区では若い先生方などによる在宅クリニックが増えている一方、西区よりも高齢者が多い東区ではまだ供給が足りていません。地域を「面」で考えるとともに、国の方針による病床削減やかかりつけ医制度の普及という時代背景を勘案した結果、「医師会が地域における在宅医療の普及に貢献していく必要があるだろう」と考えました。

——ホームページによると、医師会では以前から在宅関連の事業も行っていますね。

これまでは主にソフト面で活動を展開してきました。開業医の先生が在宅医療を行う場合、「24時間365日体制」が一つの壁となります。患者さんの急変時には往診する必要があり、医師一人では安心して休みを取りづらいのが実情です。そこで、八幡医師会内の在宅医会が週末、祝日に看取りの当番を行っています。先生が学会や旅行に行くな

どして数日不在にする間、在宅医会がバックアップするシステムです。また、在宅関連で言うと、八幡東区にある医師会館には訪問看護ステーションと介護保険総合センターがあり、訪問看護と居宅介護支援事業を行っています。

こうした状況下で、「診療所」というハードができれば直接的に在宅医療の普及に貢献できますし、既存の事業・環境とも有機的につながれます。医師会館にいるケアマネジャーや訪問看護師と連携しながら在宅医療を行い、看取り当番についても、診療所があればバックアップする曜日を平日に上げられる可能性が生まれます。

2025年に60歳「医師として最後のチャレンジは今」

——はっちい診療所の開設に絡む川本先生の「思い」とはどんなものだったのでしょうか。

私自身、医師として在宅医療にもっと力を注ぎたい思いがありました。私は2011年から公益財団法人健和会が運営する健和会町上津役（こうじゃく）診療所に勤務し、外来診療と並行して在宅医療も行っていました。2025年9月に60歳になる自分の年齢を考えたとき、「医師としてチャレンジできるのは体力的にも今しかないだろう」と思ったのです。私は長く医師会の活動に参加しており、理事も務めているので、2024年の夏に西田英一会長に診療所の開設を発案・相談しました。すると、「それは良いアイデアですね。八幡医師会でも検討していたところですよ」と思った以上に速やかに話が進み、総会で審議して了承を得られました。

もともと、医師会館には看護学校が併設されており、看護学生の健康診断やワクチン接種、学校心臓検診を行う八幡医師会立診療所がありました。「この診療所を活用して在宅医療を行うのはどうだろう」と以前から思っていました。

それに、医師会に在宅医療の拠点があると、医療機器の貸し出しも可能になります。私自身、健和会町上津役診療所で在宅医療を始めたときに必要な機器が不足しており、困ったことがありました。在宅医療は他の分野に比べて機器が多くは要りませんが、それでもポータブルの心電図やレントゲン、エコーなどが必要です。はっちい診療所は在宅医療に関心のある医師の相談拠点、在宅医を育成する施設としても成長していきたいので、先生方の相談を受けて機器面のニーズも把握しながらそろえていきたいと考えています。

——医師個人が開業する場合、「人」「物」「お金」それぞれのハードルをクリアしていく必要があります。医師会立だと、これらの負担が異なってくるそうです。

そうですね。「物」と「お金」の面では医師会のバックアップがありますし、「人」の面でも在宅医療の場合、開院時は多くの人手が必要ではありません。環境面でも在宅医療は先ほど話したように多くの設備や機器が要らないので、診療所の開設にあたるハード的な準備としては、パソコンの購入や電子カルテの整備、カルテ整理用の棚を購入したくらいです。人材面についても、過去に健和会町上津役診療所で一緒に働いていた看護師2人が常勤としてこちらに来てくれました。現在は常勤の看護師2人、事務1人、非常勤の看護師1人、そして私の計5人の体制です。

「高齢者に寄り添うベテラン開業医をサポートしたい」

——先生はなぜ、「在宅にもっと力を注ぎたい」と思っていたのですか。

一番に、開業医の先生方をサポートしたい思いがありました。地域で患者さんを何十年と支え続けていた先生が、「在宅をやっていないから」と患者さんの通院が難しくなったときに在宅医とバトンタッチすることがあります。しかし、患者さんからすれば信頼する医師に最期まで診てもらいたい人が多いでしょう。「こんなときに私が介入して、先生と患者さんをともにサポートできれば……」とずっと思っていました。在宅に興味があるものの二の足を踏んでいる先生の背中を押ししたいなど。

現在、在宅に注力するクリニックは増えていますが、高齢者に寄り添っていく診療はベテラン開業医の得意とするところですよ。はっちい診療所が開業医の先生と患者さんのつなぎ目として機能すれば、双方にとって良い影響を与えられるように思います。

◆川本 京子（かわもと・きょうこ）氏

1990年愛媛大学医学部卒。佐久総合病院での研修後、同院外科に勤務。2000年公益財団法人健和会大手町病院外科。2011年に健和会町上津役診療所に移り、在宅医療も行う。2025年4月、北九州市八幡医師会立はっちい診療所の所長に就任。八幡医師会、北九州市医師会理事。

【取材・文＝医療ライター庄部勇太】

記事検索

ニュース・医療維新を検索

